

CONTENTS

- 「気づき、や、思い」を、取組みに
〜第2回 法人発表会〜開催〜 2 3
- 「ひきこもり等」について考える社協職員座談会」
レポート② 4 5
- 平野区 「LINE」を活用した「見守り活動」を実施中!! 6
- 西成区 心のバリアフリーを広げる
〜玉出中学校福祉体験学習会〜 7
- 令和2年地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム
こどものSOSを大切にするために
〜こどもが安心して暮らせることを考える〜 8

大阪の 社会福祉

2021.3
790

The social welfare
in OSAKA

社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

市社協
区社協

気づき・思いから、
新たな実践を創る

コロナ禍において、地域と同様に市・区社協もまた、歩みをとめずに新たな取組みや先進的な実践をおこなっている。

今号は、「第2回法人発表
会」(2、3面)や、前号に続き「ひきこもり等の支援について考える社協職員座談会」(4、5面)のレポートなどを掲載する。



「第2回法人発表会」審査員のみなさんと発表した区社協職員

HB

新型コロナウイルスの感染者数は減ってきているが、終息にはまだ遠い▼この

混乱を収めるために、要請に従わずに、病院を抜け出した人や、遅くまで営業している飲食店に、政府は過料を科すという。しかし、要請というお願いをしていたはずなのに、それを聞かないから悪だと決めつけていいのだろうか▼かつて、ハンセン病にかかると、山奥や離島の療養所に強制的に隔離されたという歴史があった。隔離することで、病気がかかった人はもちろん、家族も地域から排除され、差別の対象になった。この政策はたくさんの人を不幸にした▼死刑の数が増えているとか、年齢を下げて少年も刑務所に入れるとか、罰則で社会を安定させようとする流れがある。共生が今の社会の目標であるはずだが、差別や排除につながるラベリングは、その流れに逆行する▼コロナの感染を抑えたいとは思いますが、「不要不急」というあいまいな言葉を理由に、排除を正当化してはいけないと思う。それぞれの理由を無視して悪と決めつけると、他府県ナンバー狩りのように、排除とセツトになるということをハンセン病から学びたい。(石)

「気づき」や「思い」を「取組み」に

「第2回法人発表会」開催

市社協は2月5日、「第2回法人発表会」をオンライン開催した。市社協・区社協の事業改善や市民サービスの向上を図るために昨年度創設した「職員提案制度」に基づき、4件の提案・実践報告がされ、審査の結果、各賞が決定した。

◆最優秀賞◆

コロナ禍での出会いと社協としての役割

港区

最優秀賞には、港区社協・地域支援担当の森田美香さんによる報告が選ばれた。
森田さんは今年度入職一年



港区社協・森田美香さん

目。着任早々から新型コロナウイルス感染症特例の生活福祉資金貸付の相談が急増し、社協総体で対応する中で、ネパールなど外国籍の申請者が多いことに気づいた。ネットワークやコミュニティが希薄であることを課題と捉え、貸付をきっかけとした新たな出会いやつながりづくりを企画。今後も、課題に對

する取組みをおこなっていくと発表した。

視聽した職員からは「社協で貸付をすることの意味を考え直すことができた」「貸付相談の中からニーズや強みを把握し、つながりを広げていく展開は、社協ならではのと感じた」「相談対応から新しい取組みに発展させる視点に感銘を受けた」などの感想があった。

◆特別賞◆

トイレ快適計画

「気づきの積み重ねで、トイレを快適にする」

住吉区

続いて特別賞に選ばれたのは、住吉区社協・老人福祉センターの川本俊一郎さん、奥田由佳子さん、廣川倫子さん、森友美さんからの報告。
老朽化が進んだトイレにまつ

わる問題を解決していく中で、「あきらめ」や「思い込み」、「過去の慣習」にとらわれていくことに気づき、発想を変え、



住吉区老人福祉センター・川本俊一郎さん

一つひとつアイデアと工夫で改善した取組みを発表した。
視聽した職員からは「考え方や発想を転換させ、職員間で共有して取り組む姿勢に感銘を受けた」「業務への考え方やアプローチの仕方など、すぐに活用できるヒントがたくさんあった」といった声があった。

◆優秀賞◆

各区社協で「コミュニケーション事例検討会」を実施してみませんか

港区

優秀賞には、港区社協・地域支援担当の田中未春さん、矢野杏佳さんによる提案が選ばれた。

地域支援の業務の進め方は、経験則に基づくことも多く、言語化することが難しく十分に継承できていないとの課題意識から、全職員が参加・発言しやすい方法を工夫し、「コミュニケーション事例検討会」を実施。他の区社協にも、「やってみませんか」と呼びかけた。

視聽した職員は「部署間の垣根を越え、区社協全体として、大きな学びの場であり力をつけられる取組み。ぜひ自区でもやってみよう」「先輩職員の経験と若手職員の疑問が、新しいアイデアにつながると感じた」と刺激を受けていた。

もう一つの優秀賞は、西成区の杉本圭市さんからの報告。生活保護世帯が多い区の特性や、老人福祉センターの利用者の多くがひとり暮らしの男性であったことから、生活支援コーディネーター、生活困窮者自立相談窓口、老人福祉センターが連携して「シニアのためのお仕事講座」を開催。高齢者の就労支援、ひいては社会参加や生きがい・居場所づくりへつながったことを報告。

◆優秀賞◆
西成区の特性を活かした
高齢者向けの
就労支援について
西成区



西成区社協・杉本圭市さん

視聴した職員からは「就労を切り口に、暮らしの見つめ直し、生活の改善、健康、人との交流につながる取組みで、参考

また、昨年度の最優秀賞受賞者・東成区社協の只石由実さんは、「障がい者が（気軽に）集まれる居場所について」とその後の取り組みについて」として、昨年度からの具体的な進展を報告。居場所づくりの取組みを通じて、多様な立場の人と意見を出し合い一緒に考えることや、何度も打ち合わせをして同じ認識を持つことが必要であること、そして「当事者からの声



港区社協・田中未春さん

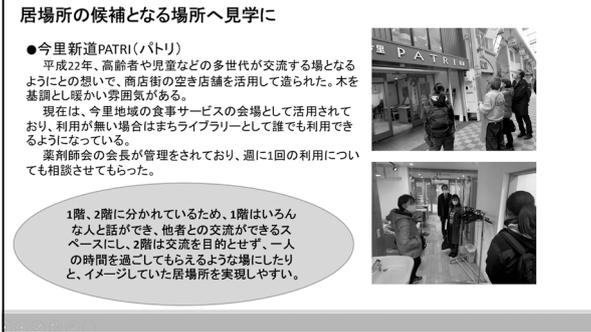
「社協の事業が多岐にわたっている強みを活かした事例で、効果的な支援を生むと感じた」と感想があった。

◆最優秀賞者からの報告◆
東成区

審査委員の一人、大阪市ポランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長は講師の中で、「コロナ禍の大変な時期であったが、いずれも質の高い報告をしていた。困難な中であつたからこそ、レベルが上がつたように感じる。次回は24区社協すべてから提案・報告をエントリーして、審査員を困らせてほしい」とエールを送つた。報告された取組みのさらなる展開と、区間での波及を期待したい。



審査員としてコメントする上野谷所長



東成区社協・只石由実さん

ひきこもり等の支援について考える 社協職員座談会レポート②

前号に続き、社協職員の座談会の様子を掲載する。居場所づくりのきっかけや場の持ち方はさまざまであるが、社協として大切に行っている視点や役割について、話を深めた会となった。

「まず、各区社協での取り組みを教えてください。」

都島区社協・川原 昨年度から、「カフェまぶる」という

カフェ形式の居場所を不定期で開催しています。20代の青年から「作業所以外に人と交流できる場がないか」と相談を受けたのがきっかけです。不登校やひきこもり気味の方等が参加し、何気ない会話をしたり、さまざまな体験や交流ができる、社会とつながる場となっています。生活支援コーディネーターや地域支援担当などの他部署も一緒に、企画運営しています。

此花区社協・鹿島 生活困窮者

自立相談支援窓口と見守り相談室で支援している中で、就労や障がい等のサービスにはつながらない中高年の方々、いわゆる制度の狭間と呼ばれる方々に社会とつながる場所が必要だと考えました。平成27年度から居場所づくりを始め、その後、参加者で「ひまわりの会」と名付け

ました。ジエンガや卓球台、折り紙等、いろんなものを準備して、その人達が好きなことをしてもらっています。

城東区社協・山田 平成24年度

から月1回、「不登校・ひきこもりの親の会」を運営しています。きっかけは8年前、社協事業が高齢者中心になっていくという課題意識と、お子さんの不登校に悩んでいるという声があったことからでした。親御さんへのサポートや同じ境遇の方同士が話せる場をつくることで、親子の関わりにもいい影響があるのではないかと考えました。また、「発達障がいについて考える会」も運営しており、そちらは当事者・家族・支援者が参加しています。

「居場所づくりで大切にしていることは？」

此花区社協・鹿島 参加する人が居心地よく来やすい場所にする

ことが一番大事だと思っています。港区社協の「居場所づくり

り会議（本誌2月号掲載）で畑仕事が好きと聞いて、採り入れようと提案してみたのですが、参加者は「ジエンガをした」とおっしゃるので、今は、みんなで黙々とジエンガをやっています（笑）

都島区社協・川原 多様な課題を抱えたご家庭も多く、誕生日

祝いやクリスマス、お正月などの季節の催しを、経験することなく育つ方もあります。こども時代にそのような機会のなかった人も、ここで人と関わりながら社会経験を積んで、人生の中で楽しいと思えることを一緒にやっていきたいと思っています。

城東区社協・山田 参加者同士

が心を許し、安心して話せる空間が大切なので、ひきこもり当事者、家族、支援に関わる専門職や経験者など参加者を限定しています。ときには、悩みを打ち明けながら感極まって涙されることもありますね。

「続ける中での気づきは？」

此花区社協・鹿島 支援が進ま

なくてもつながり続けることが大事。毎回、ジエンガが終わったら解散！みたいな感じでしたが、ある時、参加者の一人が「高齢のお母さんが心配で、自分も自立を考えている」という気持ちを初めて話してくれまし

た。この5年間、月1回、顔を合わせるうちに、職員との距離が近づき、安心できる場所になったのではないのでしょうか。緊急事態宣言で休止中も、再開をとても楽しみにされていたと聞いて、改めてこの場の必要性を感じました。

城東区社協・森 社協に入職して1年目ですが、担当する中で、悩みのある方が身近にたくさんいらつしやることを実感しました。同時に、悩みを共有し、共感する場所の大切さに改めて気づきました。

城東区社協・山田 支援

の必要な人が、まだまだ多くいらつしやるだろうと感じています。コロナ禍の今、不登校の子が増えてきていますし、発達障がいのお子さんやその親御さんも、家の中で大変な思いでいらつしやるでしょう。

都島区社協・川原 「カ

フェまぶる」を続け、また、さまざまな相談を受ける中で感じるのは、抱えている課題をたどれば、その方の生育歴での課題に行き着くことが多いということ。いわゆる8050世帯や虐待等の深刻な状態になる前に、もっと早期に支援ができ

ていたら、その人たちの人生ももしかしたら違っていただけないかと思うこともあります。

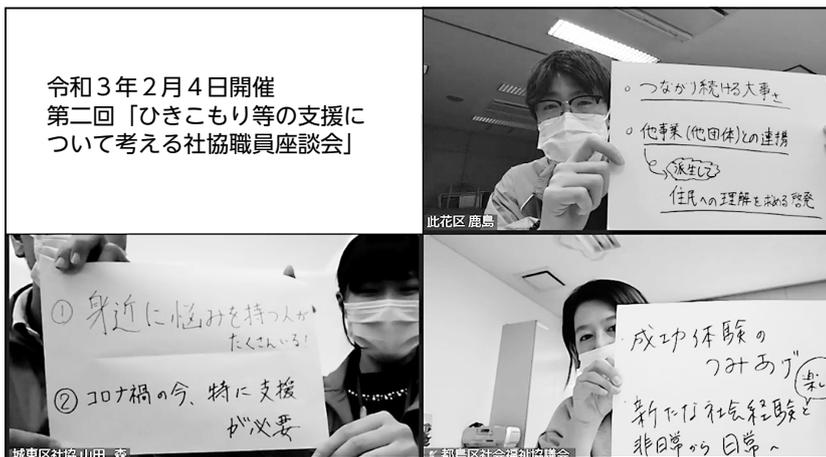
「場の運営では、どんな人たちと協力していますか？」

此花区社協・鹿島 今は社協が

主体ですが、今後は他の専門機関等、いろんな人を巻き込んで広げていきたいと思っています。ぜひ、他区のお話をお聞きしたいです。

城東区社協・山田 毎回、協力

者として来ていただいているの





◆城東区社会福祉協議会 事務局長代理・山田雅茂さん(左)、地域支援担当・森三紗さん(右)

・「不登校・ひきこもり親の会」を月1回開催
・「発達障がいについて考える会」を月1回開催



◆此花区社会福祉協議会 見守り相談室管理者・鹿島諒さん

・「ひまわりの会」を月1回開催



◆都島区社会福祉協議会 見守り相談室管理者(主査)・川原佳代さん

・「カフェま〜ぶる」を年に数回開催

は、こどもが以前に不登校だった親御さん、発達障がいについて詳しい臨床心理士の方ですね。このほか、保健福祉センターや家庭児童相談室の担当者、大学の先生に参加していただくこともありました。支援者が入るほうが、場がより充実すると感じています。

都島区社協・川原 コミュニケーションが難しい方や専門的な関わりが必要とされる方も多く、区社協が中心となつて運営、対応をしています。コンビニの店長や神社の宮司なども、地域の課題や社協の「地域で安心できる交流の場を立ちあげたい」という思いに共感し、会場提供やカフェメニューでコラボしてくださっています。コンビニの店長は「声かけ訓練」にもご参加くださり、現在強力な味方となつています。また、みなさまにご協力いただく中で「参加者に、地域に安心できる大人がいることを知ってもらいたい」という熱い想いをもつてくださっています。

—どのような広報をされましたか？

都島区社協・川原 来てほしい方に関わっている支援者から個別に声をかけるほか、学校用のチラシをつくり呼びかけました。対象を広げ過ぎると、本来

の来てほしい人が参加しにくくなってしまいます。かといって、そこを強調するとレッテル貼りになってしまう気がして…。こちらでは「学校以外の居場所を」といった表現をしましたが、「特別感」を出さずに必要な方に情報をどう届けるかは難しいところです。

此花区社協・鹿島 こちらもチラシをつくる上で、相当悩みました。ひまわりの会は「誰でも気軽に参加できる場」であり、一緒にいる場を共有する「無理に交流しなくてもいい場」でもあります。決まったことをみんなでするだけでなく、話をしたくなければ横で本を読んでいてもいいです、といったことも伝えました。

—社協の役割はどんなところにありと考えますか？

都島区社協・川原 生きた現場をしっかりと見ていくことが重要だと考えます。そして、制度やつながりから取りこぼされる人たちをどのようにすくい上げ

るのか。地域住民のみなさんと一緒に、その仕組みづくりをやっていききたい。

城東区社協・山田 課題の把握から解決に至るまで、一貫して取り組む役割があると思います。悩みを直接聞ける場、支援者が集う場をつくることも大切です。さまざまな支援者と協働していく中で、新たに必要活動が見つけられたらいいなと思います。

此花区社協・鹿島 一つは、課題を抱え、制度につながりづらい方の支援をつなぐ役割です。つなげる支援がなければ、それを創るのも社協だと思えます。もう一つの役割は、住民への理解を広げることです。生活のしづらさを感じている人の困りごとを地域で考えられるように支援する。その積み重ねが「誰もが住みやすいまちづくり」になると思うので、これからも力を入れたいです。

—最後に一言お願いします。

此花区社協・鹿島 住民や関係機関等への啓発の機会として、「ひきこもり」をテーマに研修などを企画し、いろんな団体と協力してひきこもりの方を支援する活動をおこなおうと思っています。

都島区社協・川原 コロナ禍で社会がより早く変化していく中

で、地域の声を早く拾い、柔軟に、そして今、必要なタイミングで事業化することが大切だと思っています。当初の年間計画の中になくても、気づいた課題に対して、社協の中で他部署と協力し、住民のみなさんとともにスピード感をもって進めていきたいです。

城東区社協・森 今日参加して、ひきこもりの方の居場所といても、いろんな方法があることがわかりました。これからの支援に活かしていきたいです。

城東区社協・山田 地域のみなさんや支援者の理解を得ながら、求められる新たな支援活動を創り出したいと思っています。

2回の座談会を終えて

いずれもしんどい状況にある当事者と向き合うことが出発点であった。そこから職員同士、複数部署で思いを交わし、熱を高めることが、新たな場を創り、継続する力になる。そして当事者の参画と、地域住民や多様な関係先の協力を広げることで活動が発展し、困りごとへの共感・理解につながる——これを機に新たな気づきと活動が生まれることを期待したい。

「LINE」を活用した「見守り活動」プレ実施中!!

新型コロナウイルス感染症の影響により、人が顔を合わせず、ふれあう機会が制限されている。令和元年から有償による「たすけあい活動の会」を発足し、活動を展開している平野区瓜破北地域では、コロナ禍での見守り活動において、対面での活動を継続する一方で、オンラインを活用した「見守り活動」ができないかと検討していた。

瓜破北地域福祉活動コーディネーターの生方（なまかた）和子（かずこ）さんは、新型コロナウイルス感染症の影響前からコミュニケーションツール「LINE」を使用し、「お

元気ですか?」「お変わりありませんか?」と5名の方とメッセージを送りあっていた。そのうちのひとりで地域にお住まいのひとり暮らしの女性と、2月4日、試験的にビデオ通話で見守り活動を実施した。

「ビデオ通話は初めてだった」「娘や孫ともやってみよう」と、その女性は感想を話す。お孫さんにすすめられ、スマートフォンを購入。ご家族と毎日「おはよう」「おやすみ」などをLINEでやりとりしており、返事が遅くなれば心配しすぐに娘さんが家まで来てくれるそうだ。



はじめてのビデオ通話もスムーズに

生方さんは、「今までメッセージを送りあうのみだったが、今回顔を見ながらお話ができ、嬉しかった。今後もオンラインでの見守り活動を継続し、特にひとり暮らしの方とつながりをつくれたらと思う。そのためにはLINEの講座を企画し、より多くの地域住民の方にLINEを活用してもらいたい」と感想を話す。

瓜破北社会福祉協議会



顔を見て話すと、より距離が縮まる

会長の西尾（にし）富久（とみひさ）さんは、「今回のプレ実施をきっかけに、集まらなくてもつながられる新たな地域活動を展開していきたい。そのためにも、まずは地域住民にLINEやオンラインについて知ってもらう機会を作り、より多くの地域住民とつながる仕組みづくりを検討していきたい」と語った。

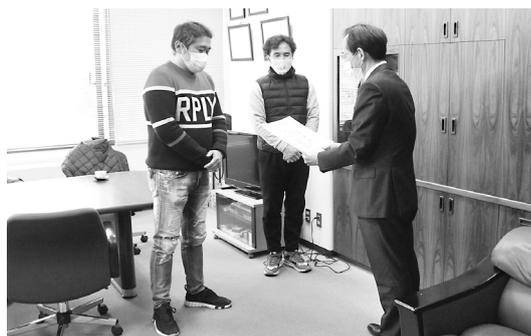
区社協・生活支援コーディネーターの井上（いのうえ）佳奈（かな）さんは、「オンラインを活用した取組みを検討するなかで、LINEでやりとりすることも見守り活動であると思う、今日のプレ実施につながりました。平野区でオンラインでの活動を広げていくためにも、今回の取組みがオンラインでの地域の活動や居場所づくりをはじめのきっかけとなるよう支援していきたい」と話した。

善意銀行

みなさんの善意を大切に

市社協では、みなさまからの善意のご寄附を、施設や団体へ払い出したり、助成金として活用させていただくことで、地域福祉の推進などに役立てています。

1月18日の収受式では、「スマイルチルドレン」に感謝状を手渡しました。いただいた寄附は、大阪市児童福祉施設連盟の事業や、市社協が実施する「地域こども支援ネットワーク事業」に有効に活用させていただきます。



令和2年7月から令和3年2月の預託・払出は次のとおりです。

預 託

<金銭>

安原記念福祉財団から650,000円
スマイルチルドレンから564,500円

<物品>

NPO法人日本もったいない食品センターから菓子5種198箱
株式会社ナガトヤからクッキー1650個
日星産業株式会社から自転車、乾燥機、発電機等
三井住友海上火災保険株式会社からキッズニア甲子園無料優待券40枚

払 出

<金銭>

社会福祉法人あいえる協会へ62,986円
大阪市社会事業施設協議会1団体（障がい）へ100,000円
大阪市社会事業施設協議会2団体（老人・地域）へ200,000円
大阪市成年後見センターへ300,000円

<物品>

23区社会福祉協議会へ菓子5種198箱
20区社会福祉協議会へクッキー1650個
大阪市児童福祉施設連盟へ自転車、乾燥機、発電機等
大阪市児童福祉施設連盟へキッズニア甲子園無料優待券40枚

心のバリアフリーを広げる

玉出中学校福祉体験学習会

2月18日、西成区社協は、西成障害者会館、玉出地域包括支援センター、老人福祉センターと連携して、玉出中学校で福祉体験学習会を実施した。地域支援担当の修田翔さんは、「福祉教育の推進は、社協の重点的な取り組みのひとつ。より充実したプログラムを創るために、他機関や専門職とも協力して進めたい」と福祉に関する学びの機会を広げることへの意欲を語った。

福祉体験学習会には、同中学の1年生（1、3組）、126人が参加。「車いす介助体験」「車いすポッチャ体験」「アイ

自分でできることを考えるきっかけにしてほしい」と心からの思いを伝えた。

体験終了後の振り返りでは、生徒の率直な感想とともに、普段車いすを利用して生徒から「友だちの助けがうれしい」とのメッセージが伝えられた。司会を務めた修田さんは「困ったときに助け合える、みんなの関係性が『心のバリアフリー』になる」と締め括った。

「車いすポッチャ体験」は、アイマスク手引き体験では、まず、地域支援担当として経験豊かな長谷川安伸さんがはじめてのレクチャー。クイズを用い一瞬にして生徒の関心をひきつける。次のクラスでは、長谷川さんの指導を受けた、地域支援担当としてまだ経験の浅い由浅悠さんが担当。「アイマスク

今回は、こうした西成区の姿勢やノウハウを学ぶため、学校での福祉教育に関する経験の少ない住之江区社協の若手職員2名が、見学・応援に駆けつけた。同区社協の地域支援担当・岡本陽子さんは「障がい是不自由ではなく『どうしたら不自由さをなくせるか』を、年齢に応じて伝えることが大切。難しいが、挑戦してみたい」。同・谷口文香さんは「やることはたくさんある。まずは、福祉教育のプログラム一覧を作成し、周知することから始めます」と二人とも取組みに



笑顔で分かりやすくレクチャーする由浅さん



“声かけ”の大切さをしっかりと伝えた

刺激を受けたようだ。身近なところからそれぞれの立場や心情を思いやり、互いに支えあう喜びが、若い力を通して広がっていくことに期待したい。

風をよむ

大阪市の区の特性と町づくり

大阪府立大学大学院 生活科学研究科 教授

岡田進一

大阪市の全人口は、約270万人で、そのうち、約67万人が65歳以上の高齢者である。つまり、大阪府全体の高齢化率は、約25%である。全国平均が約28%であるため、大阪市の高齢化率は、全国平均よりやや低い。しかし、大阪市内における24区の高齢化率は、一様でなく、さまざまな区が存在する。高齢化率が最も高い区は、西成区で39・8%、次いで、生野区31・9%、大正区31・1%であった。一方、高齢化率が最も低い区は、西区で15・9%、次いで、中央区16・5%、北区19・1%であった。高齢化率の最も高い西成区と最も低い西区との間には、高齢化率で約24%の差が見られる。

世帯単位で見ると、一般世帯が約135万世帯で、そのうち、約66万世帯が一人暮らし世帯である。一般世帯における一人暮らし世帯の比率は、約48・9%である。65歳以上の高齢者がいる世帯は、約47万世帯で、そのうち、約20万世帯が一人暮らし世帯で、約42・6%を占めている。高齢者の一人暮らし世帯は、増加傾向にあり、特に、女性の後期高齢者（75歳以上の高齢者）の一人暮らし世帯が増加しつつある。

現在、地域共生社会や地域包括ケア・システム構築の必要性が強調されているが、高齢化率や一人暮らし世帯の比率などを見ると、地域は多様であり、地域特性にあったシステムづくりを行うことが非常に重要となっている。今回、コロナ感染症の拡大を受け、これまでのようなさまざまな地域活動を実施することができなかった。コロナ禍における経験や地域特性に関する知見などを生かして、今後、少子高齢化や感染症にも対応が可能な地域活動に関するシステムづくりを行うことが非常に重要である。

令和2年度 地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム

「こどものSOSを大切にするために」

「こどもが安心してできることを、今考える」

大阪市ボランティア・市民活動センター(市社協)は、「地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム」を2月13日、あべのハルカスで開催した。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会場の様子をオンラインで配信しながら、コロナ禍の今だからこそ、こどもが安心できる関わりを考えた。

子どもの権利条約は知っていますか？

はじめに、特定非営利活動法人なごやかサポートみらい理事長の蛭沢光さん(えびさわみつ)から、「こどもの最善の利益を守る支援・居場所とは？」と題して基調講演があった。蛭沢さんは、「こどもの権利条約を知っている大人が増えると貧困や虐待は少なくなるはずだ」と力強く参加者に語りかけるように話した。

子どもの権利条約は大きく①生きる権利②守られる権利③育つ権利④参加する権利の4つの柱からなり、子どもの基本的な権利を国際的に保障するために定められた条約である。こどもたちは、自分が大切にされる存在

だと自覚することで安心感を覚える。そして、温かく見守ってくれる大人を見て、憧れや将来について考え始める。だからこそ、こどもたちには丁寧な言葉と態度、そして、安心・安全・安定がこどもの居場所活動にとつて大切だと自分自身の体験を交えて話した。

日頃からの連携と協力が、いざという時に表れる

続いて、「こどものSOSを大切にする大人」と題して、コーディネーターである桃山学院大学名誉教授で地域こども支援ネットワーク事業運営協議会代表の石田易司さんの進行のもと、十三こども0円食堂主宰の深沢周代さん、大阪大谷大学専門講師の谷俊英さん、そして蛭沢さんにより、それぞれの立場で、社会が取り巻くこどもたちの現状とこどもたちへの寄り添いについて話し合われた。

谷さんは、児童虐待相談件数が平成2年との比較で児童数は減っているにもかかわらず、令和元年には1.47倍の相談件数になっている事を指摘。深沢さんからは、新型コロナウイルス

ウィルス感染症拡大防止のため、こども食堂からフードパントリーへ活動を転換したが、こどもやその親との関わりの難しさがあることを報告。また、こどもや親からの相談に、一緒に悩み、考え、解決策を探ることも居場所活動者は、「どこにつなげばよいか」に悩んでいる現状があると話した。

蛭沢さんは、こどもの居場所活動者の悩みを解決するためには、さまざまな団体や機関、人となりが、助け合える関係性を日頃から作っておくことが大切であると発言。

参加者からは、とても興味深く、時間があっという間に過ぎたシンポジウムだったと意見が多数寄せられた。なお、シンポジウムについては、地域こども支援ネットワーク事業ホームページで動画配信する予定である。

※本取組みは大阪府共同募金会「令和2年度地域の子どもの福祉のための助成事業」を活用し開催。

問合せ

地域こども支援ネットワーク事務局
(大阪市ボランティア・市民活動センター)
06-6675-4041
kodomo@osaka-sishakyo.jp



令和2年度共同募金のお礼と報告

社会福祉法人 大阪府共同募金会

区分	2年度実績額(円)
戸別募金	295,451,383
法人募金	49,879,475
学校募金	10,256,257
職域募金	4,599,497
街頭募金	11,405,033
パッジ募金	39,425,000
その他	4,270,967
合計	415,287,612
目標額	610,000,000
達成率	68.1%
大阪市計	150,750,788
大阪市を除く各市計	231,460,831
町村計	15,483,660
本部	17,592,333
合計	415,287,612

令和2年度(第74回)共同募金運動は、コロナ禍のなか、府民の皆様の温かいご理解ご協力ならびに関係団体等の並々ならぬご尽力により、別表のとおりの実績で終了いたしました(大阪市住吉区、大阪市平野区、岸和田市、泉大津市、松原市では、3月末までテーマ型募金運動を継続中)。皆様のご支援に厚くお礼申し上げます。
お寄せいただきましたご寄付は、配分委員会、理事会、評議員会で慎重に審議の上、民間社会福祉事業の推進、地域に根ざしたさまざまな福祉活動の支援等に役立ててまいります。今後とも共同募金運動の発展に、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



腕時計感覚で首首に装着し、ボタンを押すだけ
気になったその時に「シュッ!」と一吹き

除菌プレス

WEB SHOP

1,200円 (税別・送料別)
色:ライトグレー・ブルー

<https://kzlabo.shop-pro.jp> ☎06-6459-7153

株式会社ケーラボ 〒530-0012 大阪市北区芝田2-8-10 光栄ビル2階

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

1人での保険 住まいの保険 車の保険

www.ms-ins.com